愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第 17 号
2016.5
49-60p

朝日遺跡出土木製品の出土地点および器種・樹種組成についての再検討

樋上　昇

『朝日遺跡Ⅶ』で筆者が報告・分析して以降、2004 ～ 2007 年度の発掘調査で、さらに 429 点もの木製品が出土した。これをうけて、本稿では 1511 点におよぶ朝日遺跡出土木製品を、出土地点・器種組成・樹種組成の変遷と器種・樹種の相関関係の視点で新たに分析し直した。

1. はじめに

愛知県清須市から名古屋市西区にかけて広がる朝日遺跡では、1972 ～ 79 年度の愛知県教育委員会、1981 年度の（財）愛知県教育サービスセンター、1985 ～ 89 年度の（財）愛知県埋蔵文化財センター、1998 ～ 2003 年度および 2004 ～ 07 年度の愛知県埋蔵文化財センター、さらには断続的におこなわれている名古屋市教育委員会による発掘調査などで、これまでに弥生時代中期前葉から古墳時代中期にいたる大量の木製品が出土している（愛知県教育委員会 1982、愛知県埋蔵文化財センター 1992・2007・2009 ほか）。

このうち 2003 年度までの 1082 点の木製品については、2007 年度に刊行した『朝日遺跡Ⅶ』において、筆者自身が詳細に報告・分析をしている（樋上 2007a・b）。しかし、2004 ～ 07 年度の出土木製品 429 点に関しては、整理業務と必要最低限の原稿執筆はしたものの、報告書の編集方針によって『朝日遺跡Ⅶ』と同様の分析作業をおこなうことができなかった。

そこで小論では、朝日遺跡の大規模調査が一段落したこの機会に、これまで出土した 1511 点におよぶ木製品について、所属時期ごとの出土地点・器種組成・樹種組成の変遷、そして全時期を通しての器種と樹種との相関関係についての分析を試みたいと思う。

2. 木製品出土地点の変遷

『朝日遺跡Ⅶ』においても時期ごとに主要木製品の出土地点をドットで示した図を作成したが、小論では『朝日遺跡Ⅷ』の総集編で用いられている朝日遺跡全体図に、その後の出土木製品も加えてプロットし直した。特にどこで木製品の製作がおこなわれていたかを知るために、未成品および原材が出土した地点と完成品（廃棄品）のみの出土地点のドットを分けることとした（図 1 ～ 4）。

ちなみに所属時期のわかる木製品は 1339 点。それを『朝日遺跡Ⅶ』での時期区分に従って分けたのが表 1 である。朝日遺跡の成立は縄紋時代後期～弥生時代前期（朝日 1 期）に溯るが、残念ながらその時期の木製品は、これまで 1 点も出土していない。その理由としては、当該期の居住域である貝殻山貝塚地点（後の南居住域の南西隅付近）の調査事例がきわめて少ないためと考えられる。

朝日 2･3 期が弥生時代中期前葉（朝日式期）、朝日 4･5 期が弥生時代中期中葉（貝田町式期）、朝日 6 期が弥生時代中期後葉（凹線紋期）、朝日 7 期が弥生時代後期（八王子古宮～山中式期）、朝日 8 期が古墳時代前期前半（廻間Ⅰ～Ⅲ式期）、朝日 9 期が古墳時代前期後半～中期（松河戸Ⅰ～宇田式期）である。

なお、表 1 のうち、朝日 3 ～ 4 期と朝日 5 ～

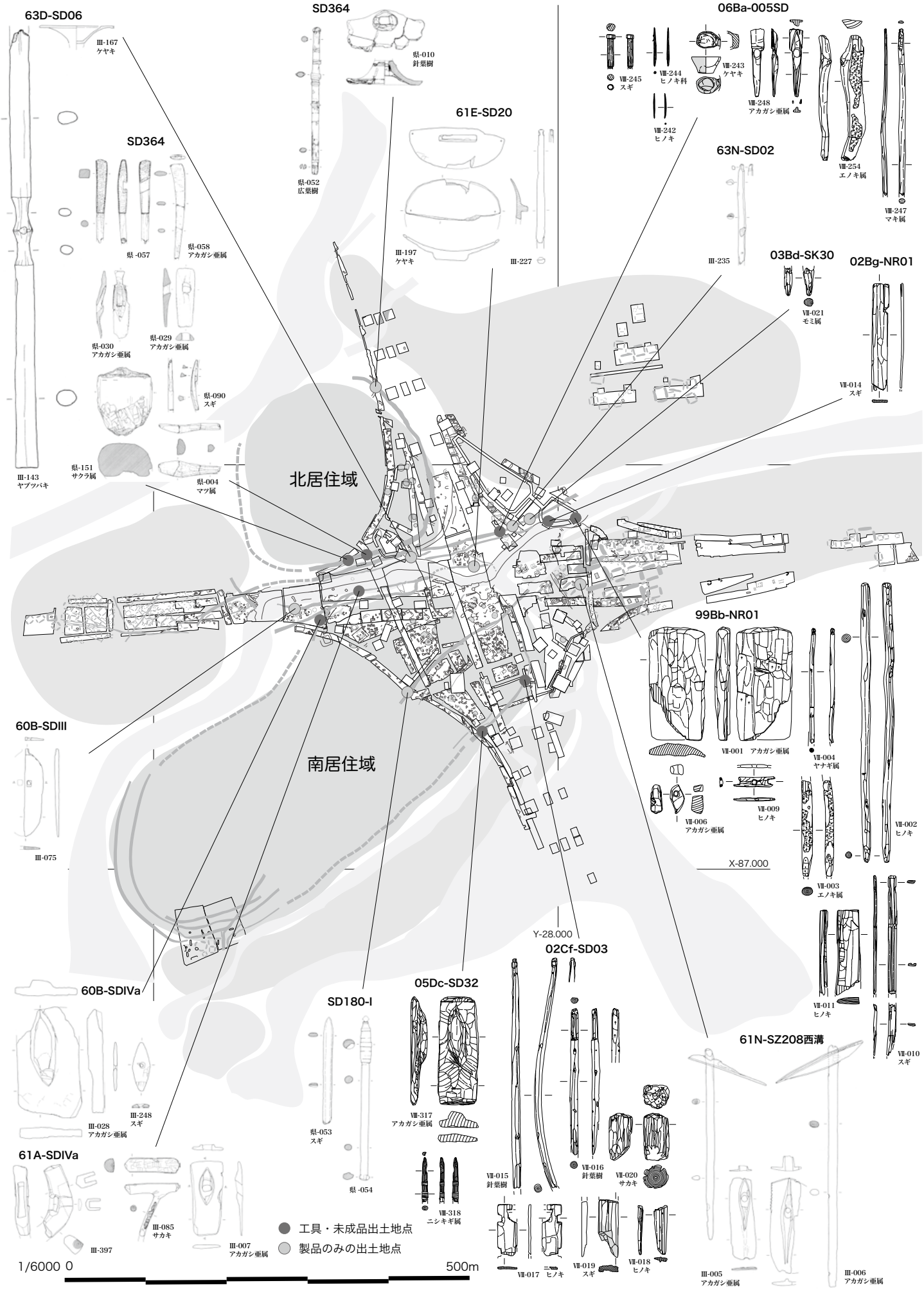


図1　弥生時代中期前葉（朝日２・３期）の木製品出土地点（遺構配置図 1:6,000　木製品 1:18）

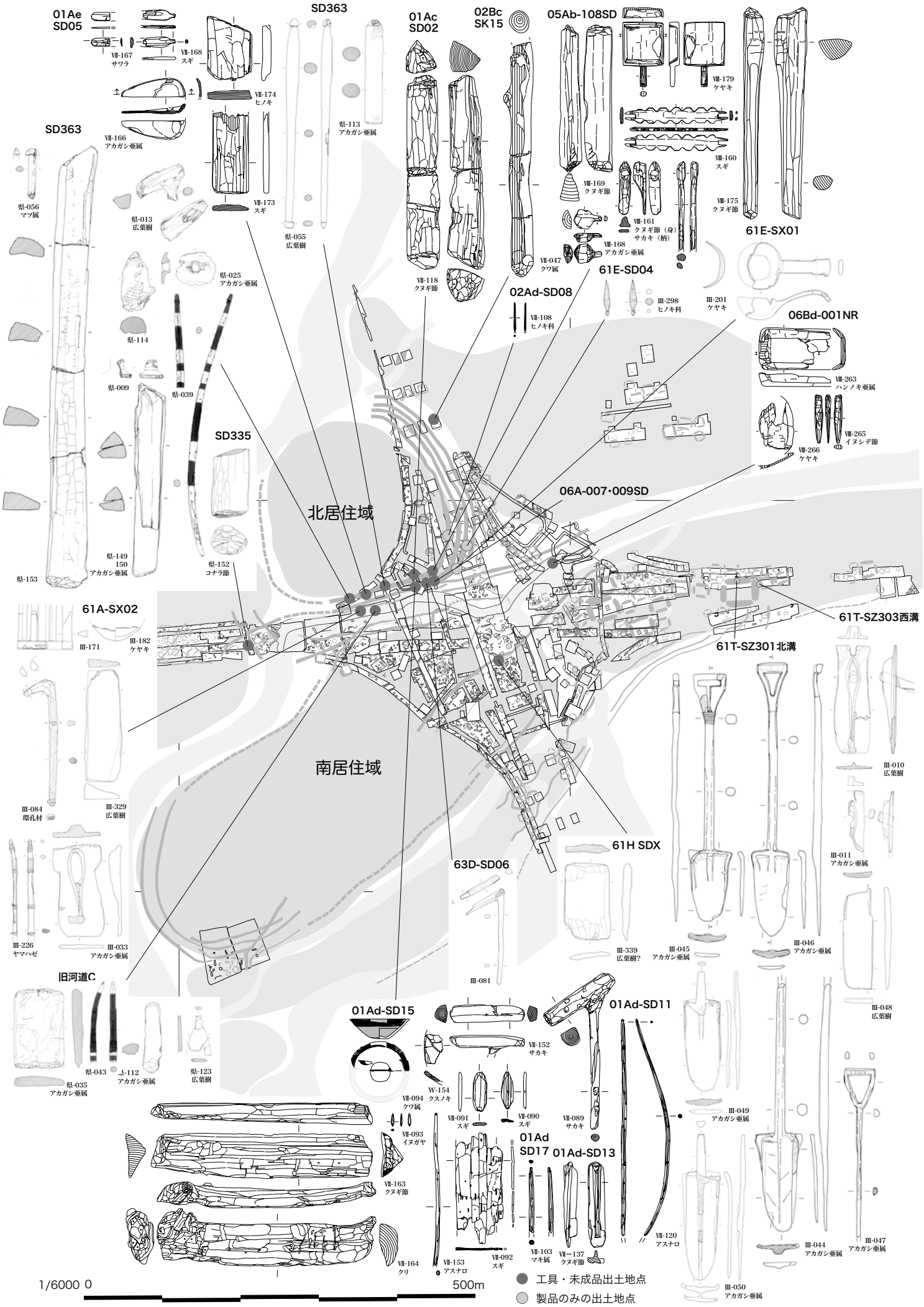


図２　弥生時代中期中葉（朝日４・５期）の木製品出土地点（遺構配置図 1:6,000　木製品 1:18）

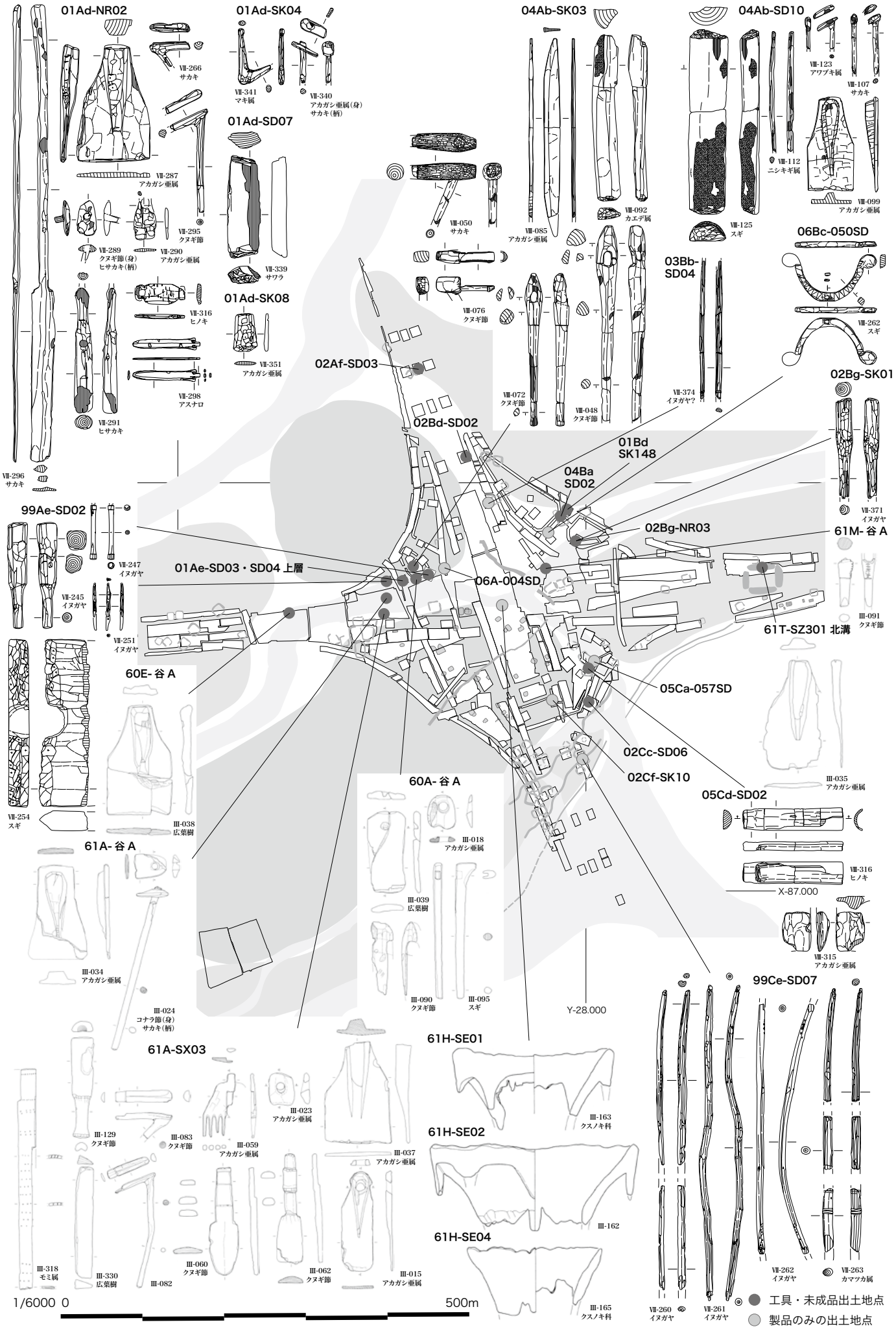


図３　弥生時代中期後葉（朝日６期）の木製品出土地点（遺構配置図 1:6,000　木製品 1:18）

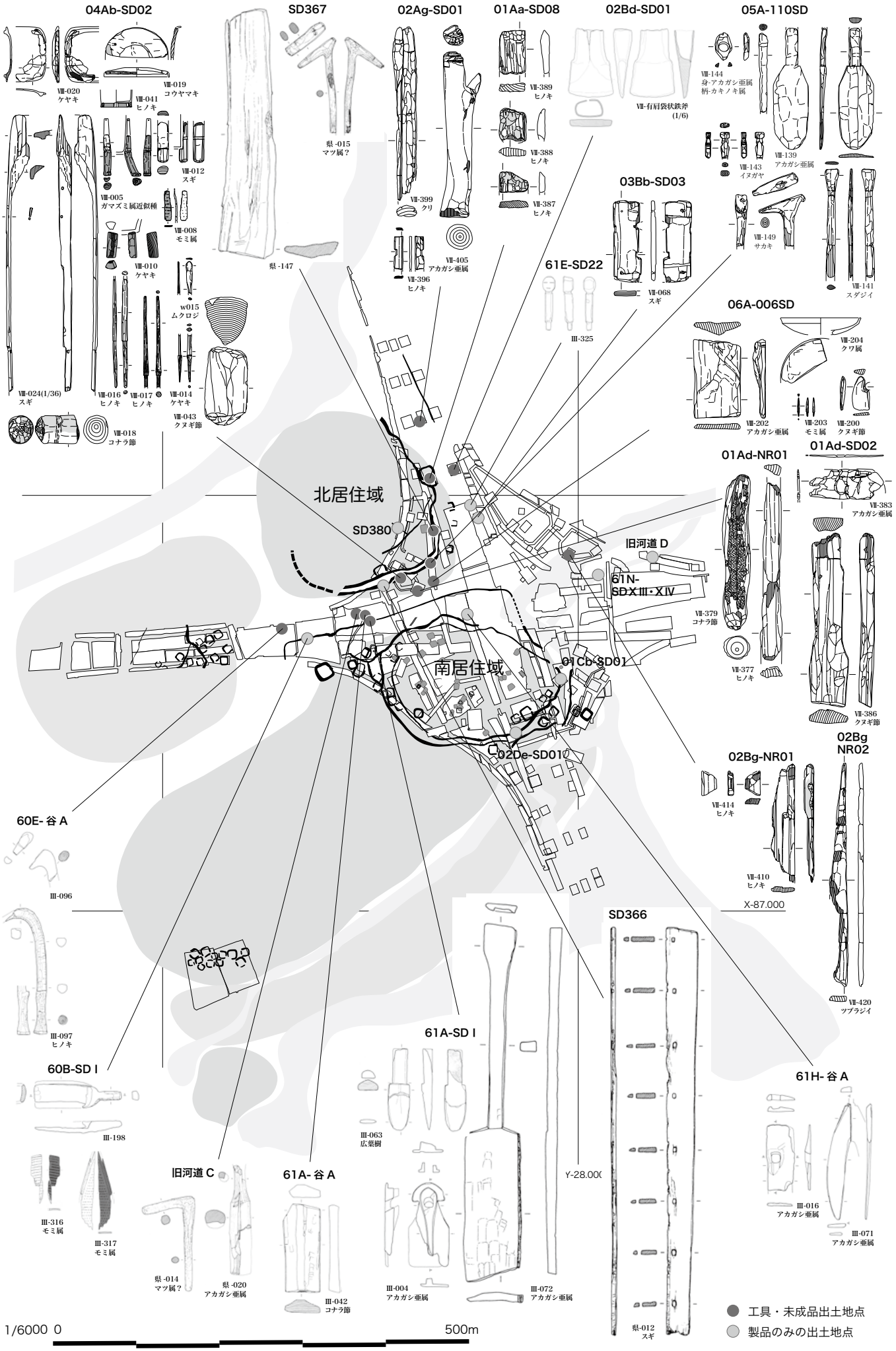


図４　弥生時代後期（朝日７期）の木製品出土地点（遺構配置図 1:6,000　木製品 1:18）

6 期とした、いわゆる過渡期にあたる資料は、その後の分析からは外している。

弥生時代中期前葉（朝日２・３期）

遺跡の中央を北東から南西に流れる谷 A を挟んで、その北側に北居住域、南に南居住域が形成される。また、それぞれの居住域の周辺には墓域が展開する。特に南居住域の東側の墓域にはこの時期から弥生時代中期中葉にかけて超大型方形周溝墓群が築かれる。

木製品の出土地点は、おおむね前述の谷 A 沿いに展開している（図 1）。なかでも東側の墓域の北側からも点々と未成品や原材を含む木製品群が出土しているのがこの時期の特徴といえる。この地点からさらに北東側の地域は日本最古級の銅鐸鋳型が出土している地点でもあり、青銅器を始めとする様々な手工業生産がおこなわれていたエリアであった可能性がある。

それとともに、北居住域と南居住域の環濠内においても木製品生産を認めることができる。

また、長軸が 30m を超える超大型方形周溝墓 SZ208 の西溝からは、刃部を互い違いに配置した直柄平鍬 2 点が溝底から出土している。

弥生時代中期中葉（朝日４・５期）

この時期になると、東墓域北側エリアでの木製品生産はほぼ停止し、北居住域南方の環濠および谷 A に集中する（図 2）。特に最も内側の環濠からは広葉樹の丸太や分割材がめだつ。

それに対して、南居住域からの出土は 61H 区の SD X から直柄平鍬未成品が 1 点出土しているのみにとどまる。

また、東墓域ではやはり超大型方形周溝墓の溝底から一木平鋤 3 点がきれいに並べられた状態で出土している。

弥生時代中期後葉（朝日６期）

弥生時代中期前葉以来の環濠集落がいったん廃絶し、複数の小規模な居住域と墓域がセットとなって広範囲なエリアに展開する。

それにともなって、木製品の出土地点、特に未成品や原材が出土する地点が前段階と比較して非常に広範囲にバラついている（図 3）。

さらに前段階の超大型方形周溝墓の溝（61T 区 SZ301 北溝）を利用して木製品生産をおこなっていることも興味深い。また、どの地点においても未成品の組成が似通っていることも重要と思われる。

製品では、谷 A の分岐点にあたる 61H 区に築かれた複数の井戸に臼をいくつも重ねて転用していること、居住域の南限に位置する 99Ce 区の SD07 から弓のみがまとまって出土していることも注目される。

弥生時代後期（朝日７期）

弥生時代中期後葉の洪水層によって谷 A の西側が埋没し、流路が南居住域の南側のみとなる。それとともに、前段階では形成されなかった北居住域と南居住域の環濠が新たに掘削されるようになる。

この時期、木製品の出土そのものは広範囲に分布する。しかし未成品や原材に限ってみれば、おおむね北居住域の周辺にのみ集中することが見て取れる（図 4）。また、04Ab 区 SD02 のように、これまで朝日遺跡では認められなかった超精製容器類が北居住域から出土していること、さらには朝鮮半島産の有肩袋状鉄斧が内部に木質部を遺したまま、やはり北居住域の縁辺で出土したことはきわめて重要である。

おそらく当該期においては、超精製木製品を主体とした木製品生産が北居住域の周辺で集中的におこなわれた可能性が高い。このことは、この時期の北居住域の性格を考えるうえできわめて重要である。

3. 器種組成の変遷

表 1 は所属時期不明の木製品を除いた 1339 点について、大まかに分類した器種別にカウントした集計結果を時期ごとに並べたものである。そのうち、古い時期の調査ではサンプリングにバラツキのある杭・土木材と、具体的に用途を示す名前がつかない棒状品・板状品などを割愛してグラフ化したのが図 5 である。

このなかで特に注目すべきは、「掘削具」とその柄のパーセンテージである。時期ごとの総点数（グラフ右端の n 値）が一定ではないものの、弥生時代中期前葉・弥生時代中期後葉・廻間 I 式期の 3 時期が、他の時期に較べて多いことが一見してわかる。

筆者は以前より一貫して、鍬・鋤類は水稲耕作のみに用いる「農具」ではなく、水田の造成、

表１　時期別器種組成一覧表

	朝日2・3期 (弥生中期前葉)	朝日3〜4期	朝日4・5期 (弥生中期中葉)	朝日5〜6期	朝日6期 (弥生中期後葉)	朝日7期 (弥生後期)	朝日8期前半 (廻間Ⅰ)	朝日8期後半 (廻間Ⅱ・Ⅲ)	朝日9期 (松河戸Ⅰ〜宇田)	合計
掘削具	16	3	14	11	42	18	12	1	1	118
掘削具柄	0	0	2	0	2	3	3	1	0	11
農具	1	2	6	5	9	3	0	0	4	30
工具・雑具	4	5	11	7	34	9	3	1	1	75
刳物容器・カゴ	8	4	12	3	9	10	5	1	0	52
食事具	2	3	2	0	0	0	1	0	0	8
紡織具・編み具	2	5	7	4	3	4	0	0	0	25
運搬具・漁撈具	1	0	2	0	2	5	0	0	1	11
狩猟具・武具	9	7	17	3	12	7	1	0	1	57
服飾具	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
威儀具	4	0	2	0	2	1	0	0	0	9
祭祀具	1	0	3	0	3	7	0	2	1	17
楽器？	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
建築部材	3	7	9	2	5	8	2	3	2	41
杭	5	1	38	5	17	19	70	9	8	172
土木材	0	0	3	0	0	0	0	1	0	4
不明部材	2	4	7	3	6	0	4	0	1	27
棒状品	20	11	45	11	44	16	21	9	14	191
板状品	32	17	76	20	64	43	41	17	32	342
残材	0	2	0	1	7	10	10	1	19	50
分割材	5	4	16	4	9	9	5	0	3	55
丸太	7	1	15	1	1	7	8	1	1	42
合計	122	77	287	80	271	180	186	47	89	1339

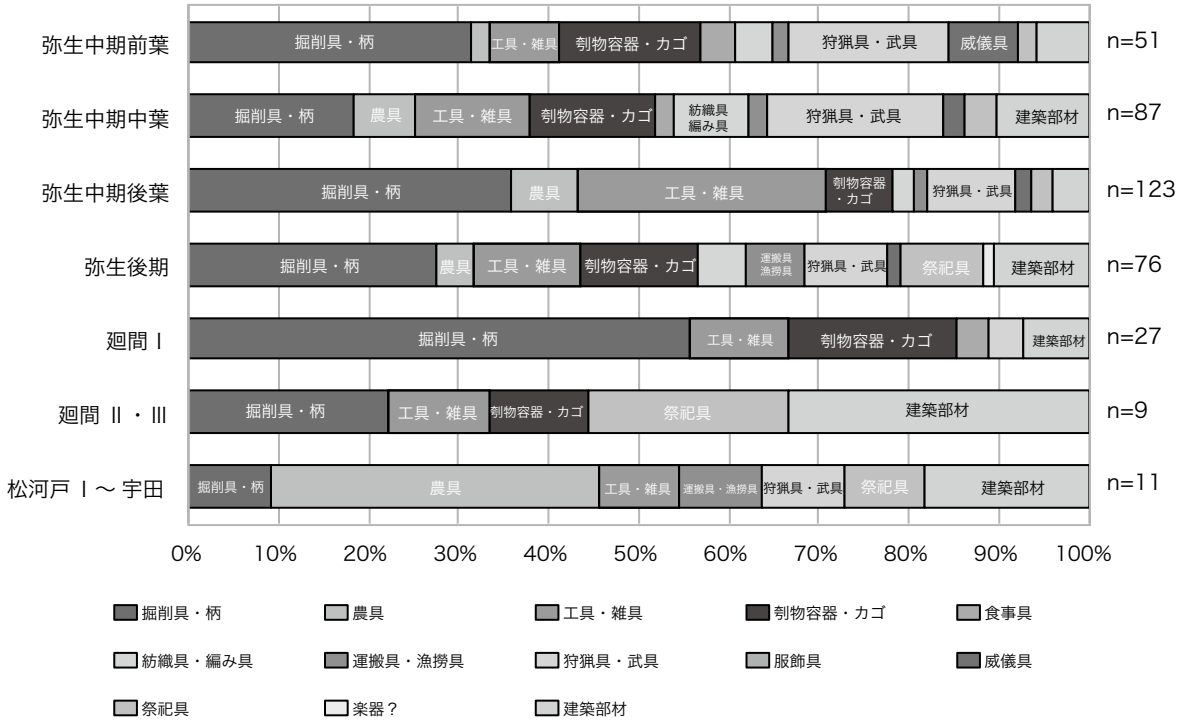


図５　器種組成変遷グラフ（杭以下を除く）

環濠・方形周溝墓・竪穴建物などの掘削に用いる土木作業用の「掘削具」でもあり、むしろ「農具」としての使われ方より「掘削具」として活躍する場面が多かったのではないかと考えてきた（樋上 2000）。その推論が正しければ、この３時期の掘削具の突出は、集落そのもののレイアウトが大きく変化したことと密接に関わっている可能性が高いことを示している。

「掘削具」以外で目につくのは、弥生時代中期後葉の「工具・雑具」の多さである。このことは、弥生時代中期前葉〜中葉と異なり、当該期には小規模な居住単位ごとに斧柄を保有し、

個別に木製品生産活動をしていた結果ではないかと思われる。

そのほかでは、弥生時代中期前葉～中葉の「狩猟具・武具」の多さがめだつ。

また、大規模な集住形態がみられなくなった廻間Ⅰ式期以降は、木製品の点数そのものも少ないうえ、器種組成のあり方も弥生時代後期までとは大きく異なっている。

4. 樹種組成の変遷

表２は、樹種未同定および過渡期の資料を除いた 1128 点について、主要樹種の点数を時期ごとに並べたものである。ちなみに、朝日遺跡で確認されている全ての樹種は、表３のとおりで、針葉樹 14 種（ヒノキ属・ヒノキ科は除く）、広葉樹 41 種である。

針葉樹では、スギが 206 点（中間時期・時期不明も含めれば 273 点）、ヒノキ科（ヒノキ・サワラ・アスナロ・ネズコなどを含む）は 255 点（スギと同様の計算法では 307 点）と圧倒的に多く、この両者で針葉樹全体の約 76%、全樹種中でも約 38% を占める。このあらゆる時期を通じて針葉樹、なかでもスギとヒノキ科が卓越するのが朝日遺跡の大きな特徴である。

次に注目すべきは、スギとヒノキ科の比率の変化である（図 6）。弥生時代中期前葉（点数では弥生時代中期中葉）をピークとしてスギは減り続け、弥生時代中期後葉にほぼ両者が拮抗し、弥生時代後期にはスギよりヒノキ科が多くなる。

この現象について、筆者は次のように考えている。もともと濃尾平野低地部ではスギもヒノキ科も皆無で、東濃や養老など周辺の山地で伐り出したものを筏に組んで、河川を利用して朝日遺跡に搬入していた。ただ、植林が進んだ現代と異なり、自然植生では、スギはヒノキ科に較べて谷筋や低地部周辺などに生育しやすいことが知られている。それゆえ、朝日遺跡からみても、スギの方がより利用しやすい位置関係に自生していたと考えられる。このスギ林を強度伐採していった結果、低地周辺のスギが枯渇し、徐々に山寄りのヒノキ科に置き換わっていったと説明することができる（樋上 2007b）。

それ以外の針葉樹ではマキ属（イヌマキ）が多い。これは広葉樹とともに、人の手が加わったいわゆる里山でしばしばみられる樹種である。弥生時代中期後葉に向けて増加していることから、朝日遺跡周辺で徐々に「日常使いの林」が人為的に形成されていったことを伺わせる。

通常の遺跡では古墳時代中期以降に増加することが多いマツ属が一貫して多いのも朝日遺跡の際だった特徴である。これは、木曽川の沖積作用が沈静化して沖積平野が安定化する時期が遅かった濃尾平野低地部では、朝日遺跡が形成された縄紋時代後期～弥生時代中期前葉段階ではアシ・ヨシといった草本類のほかに、裸地的環境を好むマツ属程度しかなかったというきわめて貧相な植生を示しているものと思われる。

広葉樹ではアカガシ亜属、コナラ節、クヌギ節の順に多い。後述するようにアカガシ亜属は掘削具を中心に多目的に用いられている。この樹種もまた、本来は沖積低地には自生していない。特に鍬などに使われる樹齢 100 年を超える大径木となれば、なおさらである。それゆえ、周辺の丘陵部から分割製材された状態で搬入されたと想定できる。ただ、廻間Ⅰ式期以降は急激にアカガシ亜属の細い芯持ち材が増加することがわかっており、大規模集落が放棄されたのち、里山的環境から潜在的自然植生である常緑広葉樹林へと遷移していった可能性がある。

いっぽう、コナラ節・クヌギ節・サカキ・ヤブツバキ・クリなどは、マキ属と同様に里山を構成する樹種である。これらが弥生時代中期後葉に向けて増加している現象は、やはり朝日遺跡周辺に人為的な林が創出されたことを示しているのであろう。逆に、竪穴建物の建築材や燃料材となるこれらの樹種を恒常的に獲得できる環境を創り出さない限り、朝日遺跡のような大規模集落を長期間継続させることはできなかったと考えられる。

このほかで注目すべきはケヤキとヤナギ属で、いずれも比較的低地や河畔林でみられる樹種である。この両者もマツ属と同様に、本来的に朝日遺跡周辺に自生していた樹種である可能性が高い。

表２　時期別器種組成一覧表

	弥生中期前葉	弥生中期中葉	弥生中期後葉	弥生後期	廻間Ⅰ	廻間Ⅱ・Ⅲ	松河戸Ⅰ～宇田	合計
スギ	36	69	52	21	15	6	7	206
ヒノキ科	19	36	46	48	39	21	46	255
マキ属	3	8	14	4	1	0	4	34
イヌガヤ	0	3	13	5	5	1	4	31
マツ属	2	10	1	3	4	3	0	23
モミ属	1	2	2	8	4	0	4	21
コウヤマキ	0	1	1	2	6	1	2	13
その他の針葉樹	3	5	6	3	0	0	4	21
小計	64	134	135	94	74	32	71	604
アカガシ亜属	18	35	34	15	17	2	4	125
クヌギ節	4	13	30	14	29	0	1	91
コナラ節	1	7	5	7	13	1	5	39
サカキ	3	4	9	1	4	1	0	22
ケヤキ	3	6	1	5	4	0	1	20
エノキ属	4	3	5	7	3	1	6	29
ヤブツバキ	3	3	4	1	1	0	1	13
クリ	0	2	2	2	2	1	2	11
ヤナギ属	1	8	0	0	1	0	0	10
ヌルデ	0	0	0	0	10	0	0	10
シイノキ属	0	3	2	2	2	0	0	9
クスノキ科	0	1	2	0	1	0	0	4
クワ属	0	3	1	1	0	1	1	7
その他の広葉樹	14	38	25	29	21	1	6	134
小計	51	126	120	84	108	8	27	524
合計	115	260	255	178	182	40	98	1128

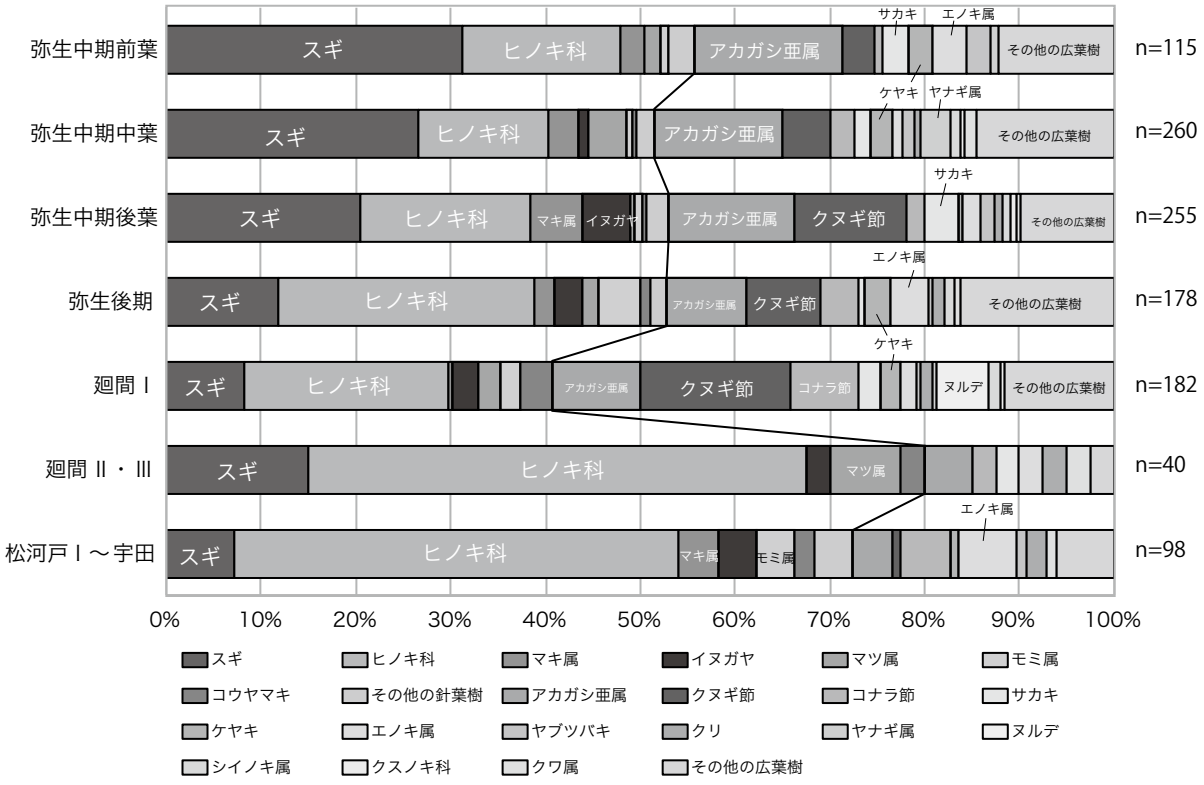


図６　器種組成変遷グラフ

5．器種ごとの樹種組成

次に、器種ごとの樹種組成についてみておきたい（表３・図７）。

掘削具とその柄は 100% 広葉樹である。掘削具はアカガシ亜属が 60% 近くを占め、残りをクヌギ節とコナラ節が補完する。これは前述のように、尾張低地部でアカガシ亜属大径木の入手が困難であったための対応策と考えられる。

掘削具柄については、弾力性のあるサカキを用いることが多い。これは特に直柄よりも、曲柄鍬の膝柄に顕著である。おそらく膝柄においては、サカキの枝分かれ部分の角度が都合良かったという面もあったのだろう。

農具、工具・雑具、容器までは広葉樹が圧倒

表３　器種別樹種組成一覧表

	掘削具	掘削具柄	土木具	農具	工具雑具	容器	食事具	紡織具編み具	運搬具漁撈具	狩猟具武具	服飾具	威儀具	祭祀具	楽器？	建築部材	杭	土木材	不明部材	棒状品	板状品	残材	分割材	丸太	その他	合計
スギ	0	0	0	5	7	9	1	9	7	5	0	1	6	0	11	8	0	5	52	133	7	4	3	0	273
ヒノキ	0	0	0	1	4	3	0	5	0	6	0	0	5	1	9	15	2	4	44	110	21	1	0	1	232
サワラ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3	2	0	0	2	7	1	0	0	0	19
ヒノキ属	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	1	3	0	0	0	0	8
アスナロ	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	0	0	1	0	0	2	0	1	4	7	0	1	0	0	20
ネズコ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	1	0	0	0	0	5
ヒノキ科	0	0	0	1	3	0	0	0	0	2	0	0	0	0	1	4	0	0	2	8	0	2	0	0	23
マキ属	0	0	0	0	1	0	0	1	0	17	0	0	0	0	4	7	0	0	22	2	1	0	0	0	55
イヌガヤ	0	0	0	0	3	0	0	2	0	10	0	1	1	0	1	6	0	1	6	2	2	2	0	0	37
マツ属	0	0	1	0	4	0	1	1	0	4	0	1	0	0	1	3	0	1	5	3	1	0	0	0	26
モミ属	0	0	0	0	1	1	0	0	0	8	0	0	1	0	0	0	0	0	3	8	1	0	0	0	23
コウヤマキ	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	4	0	0	5	4	0	0	0	0	15
カヤ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	1	0	0	5
ツガ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	0	0	0	0	4
イチイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
カラマツ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
針葉樹	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	6	5	0	0	0	0	17
小計	0	0	1	8	25	15	2	20	10	56	0	3	18	1	34	54	2	13	156	297	34	11	3	1	764

	掘削具	掘削具柄	土木具	農具	工具雑具	容器	食事具	紡織具編み具	運搬具漁撈具	狩猟具武具	服飾具	威儀具	祭祀具	楽器？	建築部材	杭	土木材	不明部材	棒状品	板状品	残材	分割材	丸太	その他	合計
アカガシ亜属	71	1	0	2	7	2	2	1	1	0	0	1	1	0	3	19	1	1	4	5	1	5	10	0	138
クヌギ節	16	1	0	8	11	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	39	0	0	2	13	0	11	2	0	104
コナラ節	12	0	0	1	5	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	4	0	4	4	3	0	3	8	0	46
エノキ属	0	0	0	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	1	0	1	4	2	11	6	0	33
ケヤキ	0	0	0	0	0	17	2	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	4	2	1	1	0	31
サカキ	0	6	0	0	12	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	1	3	2	1	0	1	0	29
クリ	0	0	0	0	0	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	3	0	0	1	3	0	3	1	0	15
ヤブツバキ	0	1	0	2	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	0	0	0	3	0	13
カエデ属	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	2	2	0	1	1	0	13
シイノキ属	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	3	0	0	1	3	0	1	0	0	11
ムクノキ	0	0	0	1	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1	1	1	0	11
ヤナギ属	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	9	0	0	1	0	0	0	0	0	11
ヌルデ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	1	0	0	0	0	0	0	11
クスノキ科	0	0	0	2	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	8
クワ属	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	2	0	0	1	0	9
サクラ属	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	1	1	1	0	9
ムクロジ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	2	0	7
カマツカ属	0	0	0	0	2	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
ミズキ属	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	2	0	5
ハンノキ亜属	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	4
トチノキ	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3
ヒサカキ	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3
ニシキギ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
ヤマハゼ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
エゴノキ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	3
モクレン属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	3
カキノキ属	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
イヌシデ節	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2
アワブキ属	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
ムラサキシキブ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	2
ブナ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2
トネリコ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
タブノキ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2
コクサギ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ガマズミ属近似種	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ハリギリ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ハコヤナギ属	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ヤシャブシ節	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
カバノキ属	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
キハダ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
ニガキ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
環孔材	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4
散孔材	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3
広葉樹	22	3	0	4	2	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	1	0	3	5	1	0	0	6	0	50
小計	123	14	0	27	52	35	8	6	6	7	0	4	3	0	12	115	3	11	33	50	9	42	50	0	610
樹種不明	0	0	0	3	10	15	0	8	1	9	1	2	2	0	7	7	0	11	10	33	10	5	3	0	137
合計	123	14	1	38	87	65	10	34	17	72	1	9	23	1	53	176	5	35	199	380	53	58	56	1	1511

的に多く、紡織具・編み具、運搬具・漁撈具、狩猟具・武具、祭祀具、建築部材は針葉樹が卓越する。

農具では、竪杵にヤブツバキの芯持ち材とクヌギ節の分割材が、臼にクスノキ科が多用される。

工具、特に斧柄については、石斧の柄には縦斧にはアカガシ亜属やクヌギ節・コナラ節など、横斧には鍬膝柄と同様にサカキを用いるが、鉄斧になると両者ともにスギ・ヒノキ科などの針葉樹へと移り変わっていく。

容器についてはケヤキが多くクワ属が少ないのは東日本的な様相といえるかもしれない。

狩猟具・武具のうち、スギ・モミ属は楯に、マキ属とイヌガヤは弓に用いられている。楯では、おおむねスギからモミ属へと移り変わっていくようである。弓にはヒノキ科やマツ属も使用されている。

杭では、クヌギ節、ヒノキ科、アカガシ亜属、ヤナギ属、ヌルデの順となる。このうち、特にクヌギ節とヤナギ属は、朝日遺跡周辺の植生を反映したものと考えられる。

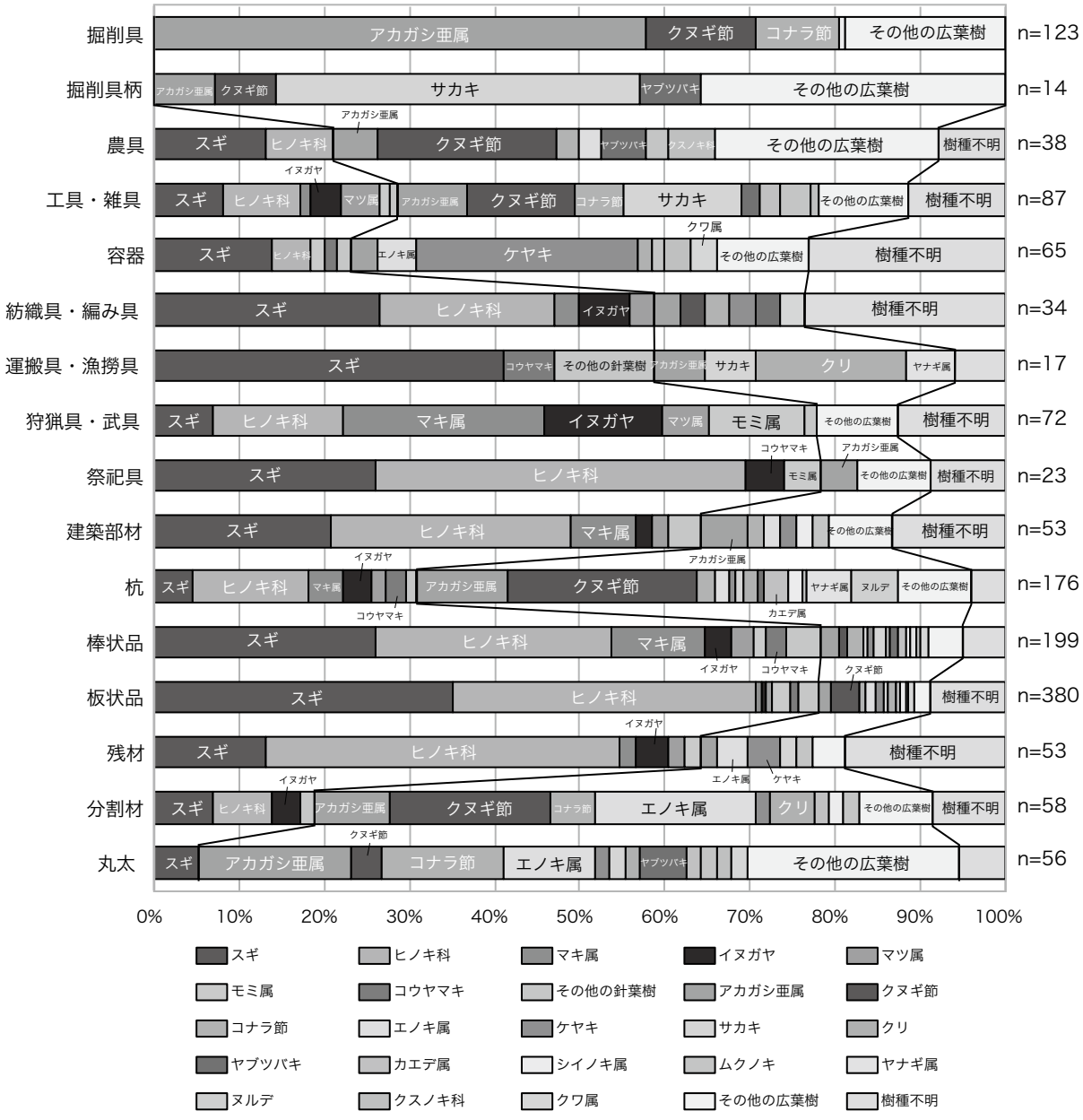


図7　器種別樹種組成グラフ

棒状品、板状品、残材では、スギやヒノキ科といった針葉樹が圧倒的多数を占める。

しかしながら、分割材や丸太では逆に広葉樹が多い。ここではエノキ属がめだつが、この樹種に関しては、朝日遺跡では点数こそ多いものの、何か決まった使用法があるわけではない。

6. まとめにかえて

以上、これまで長年の発掘調査で出土した朝日遺跡の木製品 1511 点について、その出土地点・器種組成・樹種組成の変遷や器種と樹種の相関関係について、ごく簡単な分析をおこなってきた。基本的には 2007 年度に刊行した『朝日遺跡Ⅶ』における筆者自身の分析とはさほど変わらないため、結果的には屋上屋を重ねることとなった。

ただ、2009 年度刊行の『朝日遺跡Ⅷ』に掲載された、特に弥生時代後期に属する北居住域周辺出土資料が一気に 100 点近く増加したことによって、同時期の各種データの信頼性が格段に高くなったのは重要である。

この弥生時代後期の木製品は、近畿地方を始めとして全国的にもまとまって出土する遺跡はきわめて限られているのが現状である。しかし、当該期には工具の鉄器化が完了するとともに、度重なる強度伐採により沖積低地周辺におけるアカガシ亜属大径木の枯渇が想定されている。以上の状況をうけて、列島規模で木製品の生産・流通体系が大きく変化したと想定されるのが、この弥生時代後期なのである（樋上 2005・2011）。

北居住域周辺で認められる超精製容器類などを含む木製品の集中生産体制は、山陰地方の鳥取県青谷上寺地遺跡などと共通した様相を呈しており、首長から王へと転化していく支配者層によって管理される新たな木製品生産のあり方を示しているといえよう（樋上 2009）。

参考文献

愛知県教育委員会　1982 『朝日遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター　1992 『朝日遺跡Ⅲ』

愛知県埋蔵文化財センター　2007 『朝日遺跡Ⅶ』

愛知県埋蔵文化財センター　2009 『朝日遺跡Ⅷ』

樋上　昇 2000「『木製農耕具』ははたして『農耕具』なのか - 新たな機能論的研究の展開を考える -」『考古学研究』第 47 巻第 3 号 p.97-1-0　考古学研究会

樋上 昇　2005 「木製品専業工人の出現と展開 - 伊勢湾周辺地域における木製品の生産と流通をめぐって -(上・下)」『古代学研究』第 168 号 p.1-18・169 号 p.21-37　古代学研究会

樋上 昇　2007a 「木製品」『朝日遺跡Ⅶ　出土遺物』p.168-244　愛知県埋蔵文化財センター

樋上 昇　2007b 「朝日遺跡出土木製品の樹種組成と周辺の古植生」『朝日遺跡Ⅶ　総括』p.35-60　愛知県埋蔵文化財センター

樋上 昇　2009 「木製容器からみた弥生後期の首長と社会～青谷上寺地遺跡と朝日遺跡からの素描～」『木・ひと・文化～出土木器研究会論集～』p.61-76　出土木器研究会

樋上 昇　2011 「木工技術と地域社会」甲元眞之・寺沢薫編『講座 日本の考古学　第 5 巻　弥生時代 上』p.731-755　青木書店